様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１６４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2016
課題番号：２５６７０９７２

研究課題名（和文）シングルマザーの生きる力による思春期の子どもをもつ家族の発達危機への対処と解決

研究課題名（英文）Experiences of single mothers with adolescent children

研究代表者
池内　和代（IKEUCHI, Kazuyo）

高知大学・教育研究部医療学系看護学部門・教授

研究者番号：５０５８４４１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　「Mixed methods research」を用いて,子どもが思春期を迎える「家族の発達危機」に対するシングルマザーの「生きる力の源泉」の体験を明らかにした。
　対象者は，思春期の子どもの子育てに苦悩し子どもの将来への心配を持っていた。しかし，責任ある養育への惜しみない努力と前向きに暮らす毎日の工夫を基盤に周囲の力を借りる力を持ちながら，対象者其々の形で苦悩を乗り越えようとする強い力があった。その力の支えは，子どもの成長への期待と自身の展望，それでいいという承認を引き出す肯定的感情であった。これらの体験がシングルマザーの「生きる力の源泉」であり，そこに対する支援が必要であると考える。

研究成果の概要（英文）："Mixed methods research" was used to clarify the experience of single mother's "a source of living power" against "crisis of family development" where children are at puberty.
The subject was suffering from child-rearing of adolescents and had concern about the future of children. However, while having the power to borrow the power of the surroundings based on the generous efforts to responsible care and the everyday ingenuity that lives positively, there was a strong ability to overcome anguish in each of the subjects. The support of that power was a positive feeling that brings out expectations for children's growth, their own perspective, and approving themselves. In other words, these experiences were thought to be "a source of living power" by a single mother, and our study demonstrates it is necessary to support on it.

研究分野：看護学

キーワード：シングルマザー　思春期の子ども　家族の発達危機　生きる力

１．研究開始当初の背景

シングルマザー123.8 万世帯の約 80%は離婚による[1)]。シングルマザーは種々のリスクにも関わらず離婚を決意し一人で子どもを育てようと決意した親であるとともに，親として葛藤しストレスフルな危機的様相にある。シングルマザーにとって子どもの養育は大きな悩みであり，思春期の子どもをひとりで養育することは，特に大きな重荷やリスクになっている。

一般に思春期の子どもは，乳幼児期以来蓄積してきた親との親密性と同一化による肯定的な親への同一化と，「こんな（親のような）人間にはなりたくない」と感じる否定な同一化の間で揺れ動く。親に相談や助けを求めなくなるなど，思春期の親子関係は質的な変化を引き起こす。また，思春期の子どもは，第二次性徴による身体的大変化に伴い性感染症や人工妊娠中絶の問題を抱える時期でもある。また，思春期の子どもが，性を含めた未知の世界の危機にさらされているように，思春期の子どもを持つ母親も,大きな戸惑いや不安を抱えている。特に，思春期の子どもを持つシングルマザーは，心理社会的ストレスが高いと報告されており[2)]，シングルマザーは今まで子どもを育ててきた過程を振り返りながら，子どもとの関係を再構築する時期であるともいえる。加えてシングルマザーは，離婚によって子どもに父親を喪失させた負い目を抱えていると予測され，思春期の子どもを持つシングルマザーは家族の発達危機の状況であると考えられる。

今までの多くの研究は，シングルマザーの子どもの若年ハイリスク妊娠や，子どもによる孫への虐待等を，シングルマザーの子育てにおけるリスクと捉え，その関連要因や原因の解明を試みている。しかし，離婚によりシングルマザーとなった母親は「ひとりで子どもを育てる」決意をし，日々の生活を歩んでいる「生きる力」をもつ人であると考える。本研究では日々の困難のなかで，子どもを一人前に育て上げるシングルマザーの力の源泉について着目する。

研究結果はシングルマザーとその家族に関わる保健医療・教育・福祉関係職種への支援資料として活用でき,具体的な支援方法の指標となる。さらには,面接による内省はシングルマザー自身にも「生きる力」を与えるものとなると予測される。

２．研究の目的

1）子どもが思春期を迎える「家族の発達危機」を,シングルマザーがどのように乗り越えていこうとしているのか,子どもが自立期（成人）を迎えようとしているシングルマザーが「家族の発達危機」をどのようには乗り越えたのかの体験を明らかにする。

2）シングルマザーの「生きる力」の源泉について考察し，シングルマザーに対する支援の方法を明示する。

３．研究の方法

1）研究デザイン

シングルマザーの「生きる力」を明らかにするために,量的研究・質的研究結合の研究デザインである「Mixed methods research」とした。

2）研究対象

第１子が思春期の子どもをもつシングルマザー8 名，第１子が思春期を終えた子どもを持つシングルマザー8 名の計 16 名を対象とした。また，死別と離婚では家族の危機の様相が異なると予測されることから，シングルマザーとなった理由は離婚とした。子どもは働いている場合やニートの場合も含めた男女の子どもをもつシングルマザーとした。思春期を終えた子どもの年齢は，母親が子どもの思春期を想起しやすく，成人への移行期である高校卒業後の年齢 19 歳～20 代の青年期の男女とした。

3）収集方法

研究者の大学ホームページに調査対象者募集のバナーを掲載しリクルートする。また,研究者や母子会（地方自治体など）からスノーボール方式で対象者をリクルートした。

4）分析方法

(1)シングルマザーの首尾一貫性（SOC ：Sense of Coherence 尺度：13 の質問項目からなり「とてもよくある」～「全くない」7 段階評定で点数が高いほど SOC が高いと評価する・最高 91 点）[3-5)] と，心理社会的不安（不安尺度：15 項目からなり「かなり思う」～「全く思わない」の 5 段階評定で点数が高いほど不安が強いと評価する・最高 75 点）[6)・7)] の質問紙から得たデータを記述統計しシングルマザーの状況を客観視する。

(2)次に，ナラティヴ・アプローチを用いて得たデータを，シングルマザーが直面した困難や支えとなった，文化的,社会的,心理的文脈を過去・現在・未来の時間軸で下記の手順に従って質的記述的にまとめる。

①逐語録を作成し，データを繰り返し読み全体像を把握する。

②シングルマザーが直面した困難や支援等の文脈を取り出し，コード化し共通点について分類する。

③複数のコードが集まったものに対してネーミングし，サブカテゴリー化する。

④サブカテゴリー間に共通する内容を見出しカテゴリー化する。

⑤シングルマザーが「家族の発達危機」である思春期の子どもを持つシングルマザーがどのように乗り越えていこうとしているのか，またどのように乗り越えてきたのかの

シングルマザーの体験の構造図を描く。
(3)ナラティヴデータとSOC尺度値（首尾一貫性）の結果を合致させ，シングルマザーの「生きる力の源泉」として具体的に示す。
(4)最後に，第１子が思春期であるシングルマザーと,第１子が思春期を終えているシングルマザーの「家族の発達危機」におけるシングルマザーの「生きる力」について考究し，支援の方法を考える。
　上記一連の方法の信頼性や妥当性についてスーパーバイズを受け検討する。
5）研究期間
　平成25年倫理審査承認後～平成28年12月
6）倫理的配慮
　看護研究のための倫理指針（日本看護協会），疫学研究に関する倫理指針（文部科学省・厚生労働省）を遵守し研究を実施した。
(1)研究について高知大学研究倫理委員会の審査を受け承認を得る。
(2)対象の紹介を依頼するすべての施設（母子会等）に研究計画書を提出し審査を受ける。承認が困難な場合は，研究内容を再検討し再度倫理委員会の承認を得た上で再審査を依頼する。あるいは他施設への依頼を検討するなど，研究遂行に努力する。
(3)本研究は特定地域での調査のため，個人情報の保護を厳格に実施する。面接調査では,個人情報は面接者のみが取扱い，2重コード化によって匿名データを作成し分析する。また，デモグラフィック変数の収集および取扱いに十分に配慮する。
(4)説明書に倫理的配慮（調査目的・方法・自由意思による参加・プライバシーの保護）を明記し，調査は，対象者へのインフォームド・コンセントに基づいた文書による同意を得て行う。
(5)収集した資料はパソコン本体に保存せず,電子媒体に保存し厳重に施錠管理する。
(6)成果発表の際は，特定地域の調査であることを十分考慮し，発表内容・機会・場所等について厳格な検討を行う。
(7)資料及びデータは，面接調査対象者の開示要求に対応するため，研究終了後5年間保管後，複数の研究者立会いのもと廃棄する。

４．研究成果

1）対象の背景
　表１のＡ氏からＨ氏の８名を子どもが思春期の危機を乗り越えて自立へと向かう【第１子が思春期を終えた子どもを持つシングルマザー】（以下【子どもが思春期を終えた母親】と表現する）とした。Ｉ氏からＰ氏の８名を【第１子が思春期の子どもをもつシングルマザー】（以下【子どもが思春期の母親】と表現する）とした。

表１：対象の背景

	年齢（歳代）	健康状態	第1子の年齢（歳代）	子ども就職	両親と同居
A氏	50	良好	20	就職	母親
B氏	40	良好	10	学生	別棟
C氏	40	良好	20	学生	無
D氏	40	良好	20	就職	別棟
E氏	50	良好	20	就職	無
F氏	50	良好	20	就職	有
G氏	40	良好	20	学生	有
H氏	40	良好	10	就職	無
I氏	40	良好	18	学生	無
J氏	30	やや不良	10	学生	無
K氏	50	良好	10	学生	無
L氏	40	良好	10	学生	有
M氏	40	良好	10	学生	母親
N氏	40	良好	10	学生	父親
O氏	30	良好	10	学生	母親
P氏	50	良好	10	学生	無

・対象者の年齢：【子どもが思春期の母親】の年齢は（平均43.5±6.8歳）であった。【子どもが思春期を終えた母親】の年齢は41～52歳（平均47.3±4.0歳），31～51歳であった。
・対象者の健康状態：16名中15名は良好と答えていたが１名は関節痛がありやや体調不良と答えていた。
・子どもの年齢：【子どもが思春期の母親】の年齢は，11～18歳（平均15.0±2.9歳）であった。【子どもが思春期を終えた母親】の年齢は19～26歳（平均22.4±3.6歳）であった。
・子どもの社会的位置：【子どもが思春期の母親】の子どもは全て中学生・高校生であった。【子どもが思春期を終えた母親】の子どもは８名中５名が就職しており他の者は大学生であった。
・両親との同居：母親ないし両親と同居している者は７名で９名は別居であったがその内２名は別棟に両親が居る状況であった。
・離婚してからの年数：10年以上が11名，５年以上10年以内の者が５名でその内，数年前から別居していたが離婚してからは２年以内の者が２名であった。
2）シングルマザーの首尾一貫性（SOC尺度）と，心理社会的不安（不安尺度）の結果
（1）SOC尺度の結果（図1）
　【子どもが思春期の母親】・【子どもが思春期を終えた母親】ともに「把握可能感」・「処理可能感」・「有意味感」其々の項の割合は60%以上と高い得点であった。全体の平均得点は,【子どもが思春期を終えた母親】の方が【子どもが思春期の母親】より4.4点高かった。「把握可能感」・「有意味感」は【子どもが思春期を終えた母親】が高く，「処理可能感」は【子どもが思春期の母親】がわずかに高かった。特に「有意味感」では【子どもが思春期を終えた母親】が【子どもが思春期の母親】より3.9点高かく，その割合は80%以上であった。【子どもが思春期を終えた母親】が全体の平均得点において高い原因は、「有意味感」が高かったためであると考えら

れる。SOC の「有意味感」とは，「人生や生活を送る中で出会った出来事に対して，その出来事が自分にとってとても意義があり価値があると見なせる，あるいは挑戦と見なせる感覚」[8] とされている。このことから，【子どもが思春期を終えた母親】は人生経験の中で，種々の楽しい或は苦しい体験にも意味を見出し現在まで歩んできた結果が数値として現れているものと考えられる。

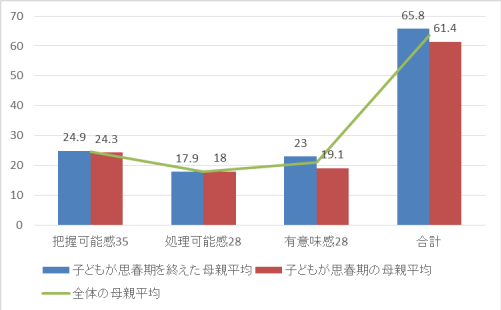

図 1：【子どもが思春期の母親】と【子どもが思春期を終えた母親】の SOC の平均点の比較（n＝16）

(2)不安尺度の結果（図 2・図 3）

全体の不安得点の平均は，49.1 であった。【子どもが思春期の母親】は【子どもが思春期を終えた母親】より 1.3 高かった（図 2）。

【子どもが思春期の母親】は子どもが思春期であり家族の発達危機の真っただ中にあるため，不安得点が【子どもが思春期を終えた母親】よりも高かったことは容易に想像できる。

不安尺度得点の高い項目の上位 5 つは,【子どもが思春期の母親】は，①自分の健康，②家事と仕事との両立，③子どもに対する責任，④金銭，失業等仕事，であった。【子どもが思春期を終えた母親】は，①子どもに対する責任，②家族への支援，③金銭，④家族の世話，⑤自分の健康，であった（図 3）。【子どもが思春期の母親】は，子どもを一人前に育てなければならない責任から，とにかく自分が健康で仕事を一生懸命することが一番であると思っているのではないかと考えられる。また、【子どもが思春期を終えた母親】は，子どもに対する責任は同様にありながらも，自身のライフサイクル[9] において，家族の世話等，新たな責任が増えてきているのではないかと考えられる。

3）ナラティヴ・アプローチを用いて得たデータの逐語録の質的分析結果

（1）【子どもが思春期の母親】と【子どもが思春期を終えた母親】のカテゴリーとサブカテゴリー

【子どもが思春期の母親】・【子どもが思春期を終えた母親】においてサブカテゴリーの内容は異なるが，11 の同様のカテゴリーが抽出された。異なって抽出されたカテゴリーは，【子どもが思春期の母親】からは，《自分が病気になった時の心配》や《子どもが非行に走らないかの心配》・《自分の背中を見ている子どもの考え方への心配》のサブカテゴリーからなる〔子どもの将来に対する心配〕の 1 カテゴリーであった。【子どもが思春期を終えた母親】からは，《周囲に対する意地》・《周囲の心ない言葉に対する口惜しさ》・《夫に対する意地》のサブカテゴリーからなる〔周囲に対する意地〕と，《子どもが大学に入る》・《優しい子どもに育ってくれた》等の 5 のサブカテゴリーからなる〔ここまで育てた誇り〕の 2 カテゴリーが抽出された。【子どもが思春期の母親】においては，子どもが順調に大人になってほしいという母親の気持ちが〔子どもの将来に対する心配〕として抽出されたと考えられる。また，【子どもが思春期の母親】と【子どもが思春期を終えた母親】の時代背景が最大 15 年の差があるため，〔周囲に対する意地〕というカテゴリーが強調されて抽出されたのではないかと考えられる。さらに，【子どもが思春期を終えた母親】では，子どもが何とか順調に育ってくれたという想いと共に，親としての役割を何とか果たせ，子どもと共に「家族の発達の危機を」乗り越えることができたという安堵の気持ちとして〔ここまで育てた誇り〕というカテゴリーが抽出されたと考える。

(2) 【子どもが思春期の母親】と【子どもが思春期を終えた母親】の抽出されたカテゴリーからみるシングルマザーの体験（図 4）

シングルマザーの体験は，『離婚時のアンビバレント』な気持ちに整理をつけ『独り親としての子育てに対する決意』していた。子どもが思春期という家族の発達危機としては，『子育てに対する苦悩』として具体的に表現されており，『子どもの将来に対する心配』に繋がるものであった。シングルマザーはこの家族の発達危機に対し，『周囲に対する意地』という気持ちとともに『周囲の力をかりる』という周囲に助けを求める力を持ち，『子どもの将来への願い』・『自分自身の展望』・『自分の成長の承認』を支えに，『子どもと対峙する』，『自分の力を信じる』という主体的な子育ての力を持って日々生活を送っていた。そして，日々生活を送ることができることに対し，支えてくれた周囲に対する『周囲の人々への感謝』の気持ちを忘れていなかった。さらに，【子どもが思春期を終えた母親】には思春期の家族の危機を乗り越えてきた過去を振り返って，『子どもへの贖罪』の気持ちが多く表出されていた。同時に『ここまで育てた誇り』という，独りで子どもを一人前に育て上げた満足感ともとらえるこ

とができる気持ちがあった。

このように，離婚時のアンビバレントな気持ちを持つ対象者は，思春期の子どもの子育てに苦悩し子どもの将来への心配を持っていた。しかし，シングルマザーとして，責任ある養育への惜しみない努力と前向きに暮らす毎日の工夫を基盤に周囲の力を借りる力を持ちながら，対象者其々の形で苦悩を乗り越えようとする強い力があった。その力の支えは，子どもの成長への期待と自身の展望，そして，それでいいという承認を引き出す肯定的感情と考える。すなわちこれらの体験が，シングルマザーの「生きる力の源泉」であると考えられる。これらの体験は直線ではなく行きつ戻りつらせん状になって繋がり生きる力になっていくものと考えられた。

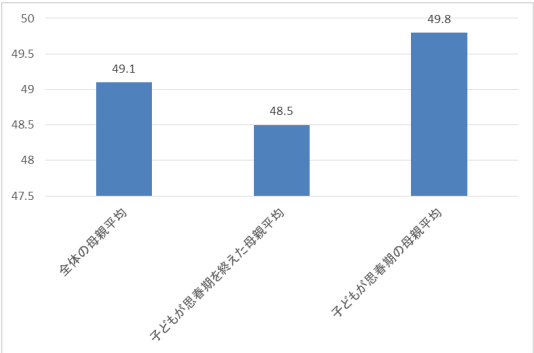

図２：【子どもが思春期の母親】と【子どもが思春期を終えた母親】の不安尺度の平均点の比較（n＝16）

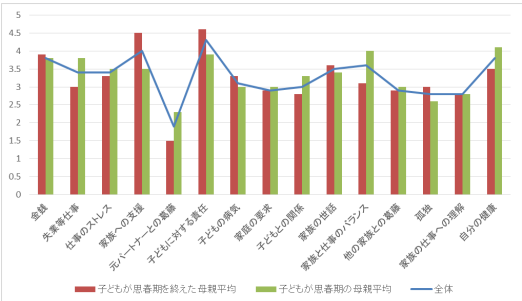

図３：【子どもが思春期の母親】と【子どもが思春期を終えた母親】の不安尺度項目の得点（n＝16）

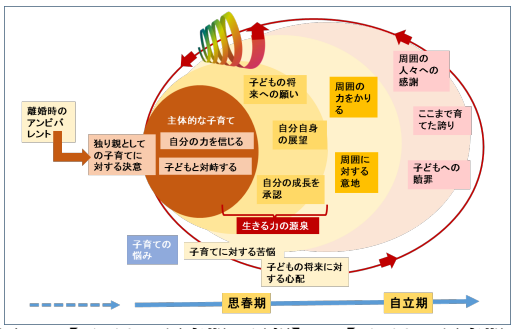

図４：【子どもが思春期の母親】と【子どもが思春期を終えた母親】の抽出されたカテゴリーの構造図

表２：【子どもが思春期の母親】の語りから抽出されたカテゴリーとサブカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
Ⅰ.離婚時のアンビバレント	1.父親といるよりは離婚したほうがよいと思う 2.父親のいない家庭にしたくない気持ち 3.主人の給料がなかったら全く生活できなかったので怖い 4.離婚の状況は周囲に支援者がいるため苦にならなかった 5.周囲の目を気にする 6.親に申し訳ない
Ⅱ.独り親としての子育てに対する決意	1.両親そろっているような環境をつくる
Ⅲ.子育てに対する苦悩	1.孤独との闘い 2.子ども自身の心身の危機に対する苦しさ 3.子どもと衝突する厳しさ 4.自分自身の体調不良のつらさ 5.子どもから言われた非難の言葉への衝撃 6.子どもの品行に対する苦悩 7.子どもへの周囲の対応への屈辱 8.離婚の理由を子どもに告げる苦しい気持ち
Ⅳ.子どもと対峙する	1.諦めない 2.突き放す 3.引きずらない 4.自分で育てた子どもの力を信じる 5.子どもの気持ちを理解する 6.父親を否定しない 7.機会をとらえて子どもが壁を乗り越えることができる経験をさせる 8.子どもと過ごす時間を大切にする 9.押し付けずに子どものしたいようにのびのびと 10.自分自身を大切にするように子どもに伝えている 11.母子がお互いに犠牲になっているという子持ちを持たない 12.子どもの力を借りて毎日を生活する
Ⅴ.自分の力を信じる	1.独りでなんでもこなす 2.どんな時も歯を食いしばって働く 3.自分に自信を持ち楽しく生きる 4.何とかなるという気持ちでその場を一つ一つ乗り越えていく 5.異性との関係に対する気遣い
Ⅵ.周囲の力をかりる	1.離婚した元夫の力を借りる 2.身内の力を借りる 3.周囲の力を借りる 4.友人と共に気分転換を図る
Ⅶ.子どもの将来に対する心配	1.自分自身が病気になった時の心配 2.子どもが非行に走らないかの心配 3.自分の背中を見ている子どもの考え方への心配
Ⅷ.周囲の人々への感謝	1.支援してくれる親がいたからここまでこれた
Ⅸ.子どもへの贖罪	1.十分接する時間がなかった
Ⅹ.自分の成長を承認	1.日々子どもと成長している
Ⅺ.子どもの将来への願い	1.将来も子どもと良い関係でいたい 2.自立して社会生活ができる大人になってほしい 3.思いやりのあるユーモアーのある対応ができる人になってほしい 4.子どもが健康であること
Ⅻ.自分自身の展望	1.自分の将来の夢はなく今を生きる 2.好きな仕事をやっていく 3.なるべく子どもに迷惑をかけたくない 4.趣味や子どもと旅行にいきたい

表３：【子どもが思春期を終えた母親】の語りから抽出されたカテゴリーとサブカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
Ⅰ.離婚時のアンビバレント	1.父親といるよりは離婚したほうがよいと思う 2.父親のいない家庭にしたくない気持ち 3.独りになっても他の人もやっているのでやればできるという思い 4.離婚の状況は周囲に支援者がいるため苦にならなかった 5.周囲の目を気にしてしばらく母子で暮らす
Ⅱ.独り親としての子育てに対する決意	1.両親そろっているような環境をつくる 2.何があっても子どもだけは手放さず自分が育てよう 3.離婚したのが恥ずかしいことではなく悪いことではないということを私が証明しないといけない 4.品格を持って誠実な生き方をすることが子どもの強みになる
Ⅲ.子育てに対する苦悩	1.孤独との闘い 2.子ども自身の心身の危機に対する苦しさ 3.子どもと衝突する厳しさ 4.自分自身の体調不良のつらさ 5.身内との悪い関係に対する苦しみ 6.経済的な心配
Ⅳ.子どもと対峙する	1.諦めない 2.突き放す 3.引きずらない 4.自分で育てた子どもの力を信じる 5.子どもの気持ちを理解する 6.父親を否定しない 7.機会をとらえて子どもが壁を乗り越えることができる経験をさせる 8.子どもと過ごす時間を大切にする 9.子どもの力を借りて毎日を生活する
Ⅴ.自分の力を信じる	1.独りでなんでもこなす 2.どんな時も歯を食いしばって働く 3.自分自身が元気であること 4.誠実に生きる背中を見せる
Ⅵ.周囲の力をかりる	1.身内の力を借りる 2.周囲の力を借りる 3.新しい男性の力を借りる
Ⅶ.周囲の人々への感謝	1.支援してくれる親がいたからここまでこれた
Ⅷ.子どもへの贖罪	1.十分接する時間がなかった 2.経済的に苦労を掛けた 3.子どものことよりも自分のことを優先させた 4.独りで生活することの厳しさを教えていない 5.もっと力を抜いて育てればよかった 6.言ってはいけないことを言ってしまった 7.子どもに気を遣わせた
Ⅸ.自分の成長を承認	1.子どもに鍛えられる強さ 2.頑張っている自分を誰かに認めてもらいたいきもち
Ⅹ.子どもの将来への願い	1.親の気持ちを理解してほしい 2.仕事を続ける 3.好きなことをしてほしい 4.甘えてほしい 5.友達をつくる
Ⅺ.自分自身の展望	1.これからも子どもを見守る 2.好きな仕事をやっていく 3.元気でいる 4.もっと子どもに優しく接したい 5.これから先の不安
Ⅻ.周囲に対する意地	1.周囲に対する意地 2.周囲の心ない言葉に対する口惜しさ 3.夫に対する意地
XIII.ここまで育てた誇り	1.子どもが大学に入る 2.子どもが社会人として会社に就職する 3.子どもから感謝の言動 4.優しい子に育ってくれた 5.シングルマザーにしか味わえない気持ち

表 4：各対象者の不安尺度得点と SOC 得点

	不安得点（合計75点）	SOC得点（合計91点）
A氏	52	61
B氏	51	69
C氏	46	74 (81.3%)
D氏	34	75 (82.4%)
E氏	51	58
F氏	54	73 (80.2%)
G氏	51	56
H氏	49	60
I氏	58	72
J氏	60	54
K氏	42	61
L氏	38	75 (82.4%)
M氏	45	86 (94.5%)
N氏	59	45
O氏	56	50
P氏	40	48

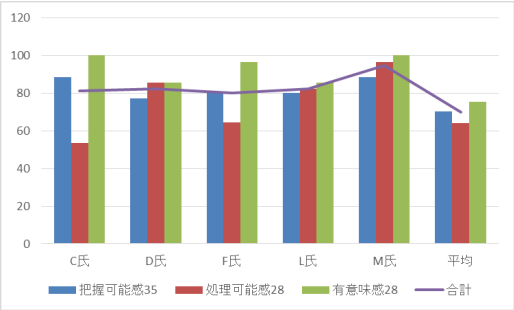

図 5：SOC 得点が高い（80%以上）者の其々の「把握可能感」・「処理可能感」・「有意味感」の割合

4）各対象者の不安尺度得点と SOC 得点

不安尺度の得点と SOC の得点には負の相関傾向があった。特に SOC 得点が 80%以上の者は不安得点が低い傾向であった（表 4）。

SOC 得点が高い（80%以上）者の其々の「把握可能感」・「処理可能感」・「有意味感」においては「処理可能感」の割合が低い者が【子どもが思春期を終えた母親】にいたが，特に「有意見感」の割合は平均よりどの母親も高かった（図 5）。

アントノフスキーはこの「有意味感」は強い SOC を維持増進するうえで重要な位置にあると述べている。そして，強い SOC をもつ人は，絶えず生じている世の中に柔軟に適応することができる人を指し，この柔軟な適応の核に「有意味感」があると考えられる。さらに，長期的な展望はもちろんのこと，本人による主体的な日々の努力の継続が必要である 8)。とも述べている。つまり，SOC の高いシングルマザーは種々の体験の事実をどういう状況で発生したのか，そこにどのようなことが影響したのかということを考え，次に生かすよう意味づけ適応しながら前進しているものと考えられる。すなわち，シングルマザーの「生きる力の源泉」にはその体験を意味づけ適応する力が重要であると考える。

以上、**「家族の発達危機」である思春期の子どもをもつシングルマザーへの支援には，この力の源泉に対する支援が必要である。つまり，**①公助・共助の充実。②シングルマザー其々の体験（心身の生きる力や展望が語り合える）を共有できる場の提供。③支え合えるコミュニティの構築。④シングルマザーが特別ではないという種々の生き方を認め合える社会の構築。⑤シングルマザー自身の努力，が必要である。

文献

1）厚生労働省，平成 23 年度全国母子世帯等調査，http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002j6es.html.（2012.10.28.）
2）Stefanie Sperlich, Sonja Amhold-Kerri and Siegfried Geyer: What accounts for depressive symptoms among mothers? The impact of socioeconomic status, family structure and psychosocial stress, Swiss School of Public heaith 2011, Publishrd online 29 June 2011.
3）Antonovsky A. Health, Stress and Coping. San Francisco; Jossey-Bass, 1979.
4) Antonovsky A. Unraveling the mystery of health: How people manage stress and stay well, Jossey-Bass, Publishers, San Francisco, 1987.
5）山崎喜比古・吉井清子：アーロン・アントノフスキー 健康の謎を解くストレス対処と健康保持のメカニズム，有信堂，222-225ｐ，2010.
6）E. Rousou RN. PhDc. C. Kouta RN. PhD. N. Middleton PhD and M. Karanikola PN. PhD：Single mothers' self-assessment of health: a systematic expioration of the Literature, International Nuesing Review, 425-434,2013.
7）Stefanie Sperlich, Mercy Nyambura Maina and Dorothee Noeres: the Effect of psychosocial stress on single mothers' smoking, Sperlivh et al. BMC Public Health 2013.
8）山崎喜比古・戸ｹ里泰典：ストレス対処能力 SOC，有信堂，59-63ｐ，2008.
9）岡本裕子：アイデンテイテイ障がい発達論の展開，ミネルヴァ書房，46-53p，2007.

5．主な発表論文等

〔学会発表〕（計 2 件）

1）池内和代，思春期の子どもを持つシングルマザーの体験－インタビューから－，第 31 回日本助産学会学術集会，2017.3.18～19，あわぎんホール，（徳島県徳島市）

2）池内和代，Experiences of single mothers with adolescent children , Asian Symposium on Health Informatics and Nursing Education，2015.8.6～8，三井広島ガーデンホテル，（広島県広島市）

6．研究組織

(1)研究代表者

池内　和代（IKEUCHI，Kazuyo）
高知大学・教育研究部医療学系看護学部門・教授
研究者番号：50584413

(2)研究分担者

祖父江　育子（SOBUE，Ikuko）
広島大学・医歯薬保健学研究院（保）・教授
研究者番号： 80171396